

ずいそう

無 心

渡 辺 正



子供の頃からチャンバラが好きで、高校に入ってからすぐ剣道を始め、以来50有余年が経つ。46歳で七段を頂き、近年無謀にも現在の最高段位である八段に挑戦し始め、既に10数年経つ。プロ（警察の剣道指導者）、アマを含め全国から毎年千人以上が八段に挑戦するが、いつも合格するのはたったの10数名、合格率1%の世界である。

何事かをなそうとする時に無心になることほど難しいものはない。仕事においてもそうだったが、特に一対一で相手と対する剣道においてはなおさらである。まして昇段審査の場においては、9人もの先達（審査員）の前で極度の緊張を強いられる中、全く初めての人を相手に、審査員の目にかなう技（わざ）を出せるかどうかは、いかに「平常心」「無心」「無念無想」になれるかに尽きる。逆の言い方をすると、剣の四戒（相手の風貌・高名風聞などに恐怖心を抱く“恐”，全く予期しない相手の構え・技などに驚愕する“驚”，相手がどうくるかと疑心暗鬼になる“疑”，相手の何処を打とうか・どう応じようかと思ひ迷う“惑”）をいかに克服するかにある。つい先日、警視庁現役の某八段の先生に、アキレス腱縦裂の痛み上がり後初めて稽古をお願いしたとき、相手が打とうと手を上げかけたその瞬間その小手を、2本目は同じく相手がこちらの面に打ってこようとした瞬間に相手の面を、それぞれ無意識に打っていた。周りで見ていた八段挑戦者達から、“なんだなんだ? ”、“今どうしたの?”と大騒ぎされたが、本人は何も覚えておらず、勝手に身体が動いた結果であった。これぞまさしく「無心」のなせる技であったと思われるが、その後“あの時をもう一度”“あの時の気持ちで”と思うが二度とできない。そう思うこと自体がすでに「無心」でなくなっている。「無心」になろうと思うこと自体もすでに「無心」ではないのである。

「おのずから映らばうつる映るとは月も思はず水も思はず」これは現代剣道の大本に繋がる新陰流開祖上泉伊勢守信綱の歌であるが、無心、無念夢想の心構え

を説いたものである。

病気以外に生死の境に

生きることのない現代の凡人には、必死の修業を積んでもその心境に至れるかどうか。しかし、アマゴルフの名人中部銀次郎は、ショットの構えに入る前には色々のことを考えるが、いざスタンスを取ったときからはただクラブを振るだけという。その中部銀次郎があるとき、“世界のホームラン王”王貞治に、「バッターボックスに入ったときホームランを狙って打つか」と問うたところ、「ただ来た球を振っているだけ」と応えたそうである。これぞ無心の境地であろう。現代でも超一流の人は、血のにじむ努力の末に、自然に無心の境地になれる何かを身につけているらしい。

「心こそ心迷わす心なれ心に心こころゆるすな」（一つのことにとらわれたり、迷ったりせず、臨機応変に動け）。「心とは如何なる物を云ふやらん墨絵に書きし松風の音」（声なき声を聞き、裏にあるものを読み）。「立ち向かう時の心は明月のくまなく照らす姿なりけり」（相手を高みからあるがままに認めよ）。これらは今後の修業の糧としたい歌である。幸いにも「好きと巧上手と三つくらべれば好きこそ物の上手なりけり」という。「大空に聳えて見ゆる高嶺にも登れば登る道はありけり」を信じて、幕末の西郷隆盛と勝海舟の会談を取り持って江戸城無血開城のお膳立てをし、かつ、明治天皇のお側にも仕えた山岡鉄舟（幕末三舟の一人、一刀流の流れをくむ一刀正伝無刀流の開祖）が、参禅し富士山を眺めて大悟したという、「晴れてよし曇りてもよし富士の山もとの姿はかわらざりけり」（雄大にそびえ立つ富士山は、過酷な自然の中で何が起ころうとも元の姿は変わらない。人も日常生活において如何なる誘惑にも負けず、どのような欲望にも惑わされずに泰然自若として過ごす姿を歌ったもの）の境地に少しでも近づきたいと願っている今日この頃である。

——わたなべ ただし 元標準部長——